

# 茶の湯文化学会会報 No.93

第93号 / 2017年6月29日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## 山上宗二と岩屋寺、そして奥出雲 岡本 文音

昨年(二〇一六年)七月、島根県仁多郡奥出雲町(旧横出町)の岩屋寺を訪れた。十年ぶり、二度目の探訪であった。

天正十六年(一五八八)、高野山にいた山上宗二は、茶の湯の秘伝書を書きあげ、息子の道七や高野山内の子院に伝授した。いわゆる『山上宗二記』である。さらに宗二はみずからこれを書き写し、複数人に贈っているが、伝授されたことが推定されているだけのものも含め、現在、知られている宛先は十一か所ある。そのうちのひとつが「岩屋寺」、そしてその岩屋寺宛の伝書から推定されるのが「三沢宗程」である。宗程は出雲国最大領主・三沢氏の十三代当主・三沢為清(天文七年(一五三八)―天正二〇年(一五九二)ころ)のことで、「鬼三沢」と称された武将である。

岩屋寺は、天平勝宝八年(七五六)に聖武天皇の勅願寺として行基菩薩による章創と伝えられる、真言宗の古寺である。本尊は十一面観音(嘉元四年(一三〇六)鏡信作)。岩屋寺は、蒙古襲来(文永の役(一二七四)のさいに後宇多田天皇の勅願寺の一つになるなど、朝廷の祈願や寺領寄進もあり、室町時代の中ごろには、

二十一房を有し、百余名の僧を抱える大伽藍となっていた。永正六年(一五〇九)、第八代・三沢為忠が藤ヶ瀬城を横田に築いたことにより、岩谷寺の勢力はさらに拡大していったが、永正十一年(一五二四)に尼子経久の兵火によって、仏閣僧房すべてが焼失した。永正十八年(一五二〇)より、岩屋寺中興の祖・快田(二四八三年ころ生まれ)による大復興事業が始まり、領主・三沢氏は中心的なかかわりをみせ、さまざまな支援をしている。天正五年(一五七七)には、再び二十一房の大伽藍となり復興を遂げている。

わたくしが岩屋寺に関心をもったのは、岩屋寺のある横田で誕生したことにある。といっても一歳のときに大阪へ転居したので、岩屋寺の記憶は当然のことながら無く、むしろ出雲横田は神話の国で、「ヤマタノオロチ退治伝説」の誓が流れてきた斐伊川のそばで生まれた、という認識だった。それが二〇〇三年に入学した社会人大学院で、生まれも育ちも横田という方と同窓となり、また、二〇〇六年には「岩屋寺宛本」(表千家・不審菴藏)を底本とした『山上宗二記』の翻刻版が岩波書店より出版され(熊倉功夫氏校注)、岩屋

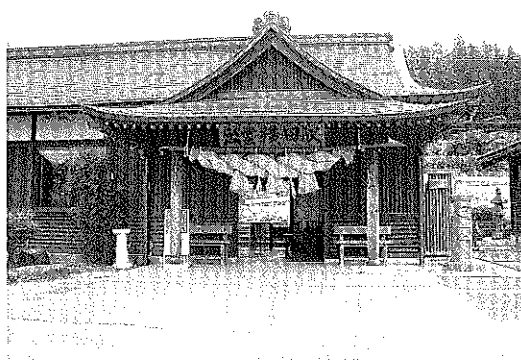
寺への興味が俄かに高まることとなり、二人しての一回目の岩屋寺探訪となった。そのときにはすでに、岩屋寺は荒れ寺と化し、足を踏み入れることも難しいということであったが、『山上宗二記』を贈られるほどの岩屋寺とはどのような寺であったか、その痕跡でも見ることができないかとの想いからであった。

背の高い大きな杉林のなかを縫うようにつづく山道の参道には、ところどころにお地藏さまが座していたが、途中にあった朽ちた山門には仁王さまの姿は無く、ぽっかりとあいた空間は虚ろだった。入口付近はそれほどでもないが、奥に進むにつれ参道は荒れ、倒れた竹が重なり合った上を、這うようにして進まなければいけないこともあった。山道をいくこと約三十分、最後に苔むした階段を登ったところに本堂があり、正面には「出雲高野山別格本山 岩屋寺」と書かれた板が置かれていた。本堂の右手には大師堂、左手には自坊があつたが、かなり荒れた状態であつた。これらからは二十一坊の大伽藍を誇つた由緒ある古刹の面影を見出すことはできず、ましてや、ここにかつて山上宗二が書いた茶の湯の秘伝書が存在していた、との想像をす

ることは難しかった。

岩屋寺が荒廃したのは、それほど昔の話ではない。昭和二十年生まれの前述の知友によると、彼女の子供のころはまだ相当に立派なお寺で、参詣者でたいそう賑わっていたが、住職の代替わりもあつてか廃れてしまったとのことであつた。

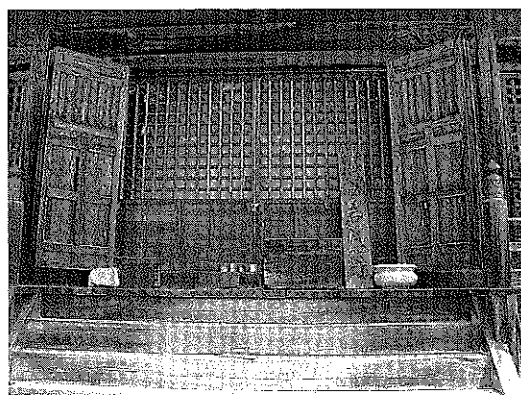
昭和五十年ごろに山門から仁王像が忽然と消え、時期は定かではないが、本尊十二面観音をはじめとする数々の寺宝や、『岩屋寺文書』や『快門日記』という貴重な史料も流出していった。昭和五十三年から寺にたびたび



出雲横田駅 岩屋寺の最寄り駅 松江から木次線で約2時間



山門



本堂

根抵当権が設定され、昭和六十二年には差し押さえから競売にかけられ、所有権も移転している。

十年前には、岩屋寺から流出した寺宝の行方を知る術を持たなかつたが、この間、すこしではあるが情報を得ることができた。二〇一二年に京都国立博物館で催された「大出雲展」を観にいったさい、期せずして本尊の十二面観音に巡り合い、感動のあまり身震いを覚えた。一メートルほどの木造座像で、玉眼、漆箔彩色が施された佇まいは、凛として美しかった。展覧会の図録によると、通常の十一面観音とは異なり、四臂(四本の腕)で、かつ座像という姿であらわされている点がいかに珍しく、その理由として、蒙古調伏がかかっている可能性があるかもしれないというのである。現在は関西の個人蔵となっている。本尊と一緒に安置されていた四天王像は、愛知県浄蓮寺にあり、昭和五十四年に愛知県文化財指定を受けている。

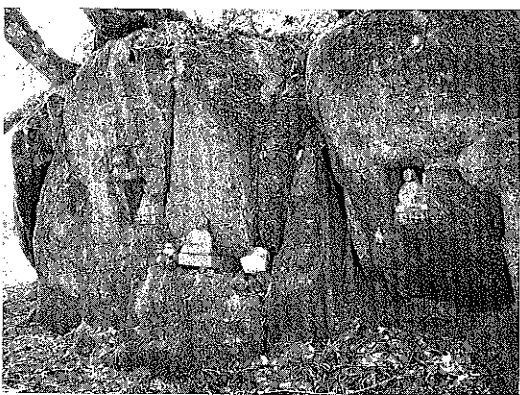
山門に安置されていた金剛力士像(十四世紀)は、現在、オランダのアムステルダム国立美術館に新設された「アジア館」の目玉として展示されている。二〇一三年には、国立美術館から招かれた京都・大覚寺の僧侶たち

によって、厳かに「開眼供養」が執りおこなわれた。その様子は、同美術館の改修工事から新装開館までを追った、二〇一四年公開のドキュメンタリー「みんなのアムステルダム国立美術館へ」に収録されている。岩屋寺の山門に鎮座する門番としての雄姿を、もう見ることができないであろう淋しさを拭い去ることはできないが、ドキュメンタリーの映像からは、国立美術館学芸員のメノー氏に慈しまれ、大切にされていることが伝わってくる。岩屋寺から流出した一対の仁王さまたちが、遠く離れたアムステルダムであっても、安住の地を見つけられたことに愁眉をひらくべきかもしれない。

今回の二度目の探訪では、奥出雲教育委員会社会教育課課長の高尾昭浩氏に案内をしてもらった。岩屋寺にあがるのが可能かどうか、事前に奥出雲町役場に問い合わせをしたところ、思いがけず同行してくださることにになり、あと、課員の若手男性と、わたくしの兄との四人連れとなった。

朝九時に奥出雲町横田庁舎から、高尾氏の運転で出発。車道から少し入ったところに車を止め、そこから参道をのぼった。相変わらずうっそうと杉が林立するなかを辿り、主の

いない山門を通り過ぎ、再び境内に立ったが、荒れ果てた本堂や大師堂はそのままに存在していた。高尾氏は地元横田の出身で、子供のころから岩屋寺に馴染みがあり、説明をしていただきながら、今回は本堂から上にも足を延ばし、弘法大師の足跡と伝えられる窪みがある弘法の岩や、鬼岩へもあがつた。鬼岩をよじ登るのは背の低いわたしにとっては一苦労だったが、そこからは横田に広がる棚田を見渡すことができ、古の三沢の殿様や寺僧がここに立ち、横田庄の豊かな絵を眺めていたのではないかと想像が膨らむ、見事な眺



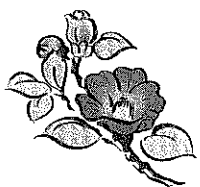
お地藏さま



棚田と残丘

望だった。

岩屋寺をくだった後、高尾氏は鉄穴流しの跡地を案内してくれた。「鉄穴流し」とは、砂鉄を含んだ山土を水とともに流し、砂鉄を採取する選鉱法の一つで、奥出雲は古来、たたら製鉄のために、鉄穴流しによる砂鉄採取が盛んにおこなわれた地域である。鉄穴流しは、山が削られ地形が変貌する、環境破壊にも繋がる手法なのだが、奥出雲地域において特筆すべきは、鉄穴流しをおこなった跡地をそのままに放置せず、人の手がくわえられ、美味しい米がとれる棚田へと再生させてきた



点である。しかも、鉄穴流しはむやみにおこなわれたのではなく、神社仏閣、神木や先祖の墓などがある場所は避けられていた。棚田のところどころに残丘と呼ばれる小山がみられるが、その名残である。新たに生みだされた環境は、重要な文化的景観や日本遺産にも指定される素晴らしいものである。  
京や堺から遠く離れた、山深い奥地にある奥出雲の寺や地方領主に、なぜ山上宗二は秘伝書を贈ったのか、はたして岩屋寺や三沢宗程は茶の湯をする力を有していたのか、と素朴な疑問を抱きつづけていたが、横田に広がる「たたら」によってもたらされた豊かな自然を目の当たりにすると、岩屋寺の隆盛や三沢氏の勢力は、鉄の産出地横田ならではの経済的基盤によって得られたことが実感され、「山上宗二記」が贈られた理由の背景をみだ思いがした。

### 理事會

平成二十八年度第三回理事會が、三月十九日(日)午後二時より同志社大学 徳照館一階會議室において行われた。理事二十名に加え、幹事八名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

- 一、平成二十九年度總會提出議案について
  - ・平成二十八年度事業報告、決算報告
  - ・平成二十九年度事業案、予算案
- 二、会長候補者選考委員会からの諮問
- 三、会長候補者の選出他
- 四、会計監査の後任の件
- 五、平成二十九年度大会について
- 六、会誌・会報について
- 七、無形文化遺産化について
- 八、その他

第一議題では、平成二十八年度事業報告と決算報告案、各例会担当者より報告があり、ならびに平成二十九年度事業案・予算案について、田中副会長から説明があり、承認された。

第二議題では、中村羊一郎理事より会長候

補者選考委員会で話し合った結果、引き続き熊倉功夫氏にお願いするという案が提示された。その理由としては、学会の運営について卓抜した指導性を発揮し、活動の充実と発展に寄与していること、また、ユネスコ無形文化遺産登録に登録するための検討が始まっているなかで、熊倉功夫氏が国レベルでの運動に重要な役割をはたしていることから、学会としても会長として全力をあげてバックアップしていく必要があることが示された。既に熊倉会長ご本人の内諾を得ていることが報告され、異議なく満場一致で承認された。

第三議題では、熊倉会長より、二年後の人事を含めて、新しい人に入ってもらうことを考えていきたいとの意向を話された。

会誌編集委員の美濃部委員長、佐藤豊三理事が任期満了となり、中村利則副会長から編集委員の退任の申し出があった。

第四議題では、昨年お亡くなりになられた小川後楽会計監査の後任に、筒井紘一氏が承認された。

第五議題では、平成二十九年度大会について、六月十日(土)に、同志社大学において開催することが提案され、これを受け、山田理事より実施計画案が出され、承認された。

来年平成三十年(二〇一八)は松平不味の二〇〇年忌にあたる。地元島根県では展覧会をはじめとする様々な記念事業が計画されようとしている。今年度のシンポジウムはその前段階として、テーマを近世後期の大名茶の湯とし、不味の茶の湯を生み出した近世後期の大名茶の湯に焦点を当てる。具体的には徳川御三家、国持大名などの茶の湯、大名庭園などの諸相から、その在り方が後の近代の茶の湯に如何に影響を与えたかについて考えてみたい。

十一日(日)の見学会については、中村利則副会長が公益財団法人松殿山莊茶道會と交渉し、一〇〇名の受け入れで、未公開を含め多くの施設を解説付きで見学すること(茶菓子付き)が、承認された。

第五議題では、会誌については、美濃部委員長から二十七号の報告が行われた。また二十九号は、平成二十九年度大会シンポジウムの特集を組むようにする。会誌の電子化について、先ずは「HPにご意見をいただきました」などの告知をし、周知していくことを始めていくことが提案された。

会報については、学会への寄贈本は「新刊紹介」を素早く行うこと。また、出版された

方は、事務局に寄贈するよう要望が出された。

第六議題では、無形文化遺産化について、今年度当初から会長の指示により、茶の湯のユネスコ無形文化遺産に向けたワーキンググループで検討してきた。当初、文化庁の姿勢は、(文化財保護法に規定される)国で文化財に位置付けたものをユネスコ推薦の前提としていたが、本年二月に文化庁の姿勢が変化し、国の文化財でなくても直でユネスコ登録に持つていくことが考えられ、その候補に生活文化の一環としての「茶道」が挙がっている(私見では「茶道」ではなく、「茶の湯」とすべきと考える)。「茶道(茶の湯)」等の直のユネスコ登録は、これらを文化財保護法上の文化財の域外に置こうとしているのではない。その背景に和食文化登録が契機となっておりともいえる。しかし、茶の湯をはじめとして、伝統文化の将来はきびしく、文化財保護法上の無形文化財に位置付けなければ、維持できなくなるのではないか。したがって、文化庁の方針に乗っかるのではなく、正当な文化財保護法上の位置づけを是として、その上で、ユネスコ登録へもつていくのが正当ではないか。文化庁が正式に「茶道(茶の湯)」のユネスコ登録を正式に検討すること

自体は悪くないが、文化庁の方針への対応は慎重にしなければならない。

文化庁に対する「茶の湯」の認知度を挙げるためにも、茶の湯文化学会の存在をアピールして、要望書を出すべきではないかと考えるので、学会としての見解をまとめたい。申請主体についても検討すべきことである。各家元など関係者を今から集めて申請主体の受け皿作りをしていくことは、さまざまな問題を含んでいるので現実的にむずかしい。むしろ茶の湯文化学会に対応の部会などを置き、自らが受け皿となっていくべきではないか。具体的なことは今後検討していくとして、要望書提出を学会で検討していくことにしたい。去年の大会でも話題になり、文化財保護法の規定する国の無形文化財に指定、そしてユネスコの無形文化遺産の登録という道筋で了承を得ていた。今後、状況に応じて、至急に必要ならそのような対応をしていくことが、承認された。

第七議題では、矢野理事より、第四回お茶三昧・二〇一七年茶の湯と茶文化に関するオンラインシンポジウム国際会議についての後援と広報の依頼があったことの報告があった。

### 例 会

東京例会

(平成二十九年一月二十一日)

『遵生八箋』に見える

茶と養生に関する一考察

張 茹涵

『遵生八箋』は明代の万暦年間に編纂された百科事典のような書物です。発表者は、まず『遵生八箋』の成書背景に着目します。明代は、都市化の進行によって市民階級が台頭したことで、官人、士人から文人集団がはみ出されました。しかし、明代後期に至ると、文人集団の一部は、複雑多岐化する官僚国家構造の煩悶から、超俗へ憧れる「山人」という生活態度を確立しました。また、山人の現れは明代後期の出版文化の隆盛とも関わっています。

次に、『遵生八箋』の内容について述べます。「遵生」という言葉は、『莊子・雜篇・讓王第二十八』に見られ、「命を大切にすると意味しています。そして、茶と関わっている「飲饌服食箋」で見られる養生と喫茶の体

### 総 会

平成二十九年年度総会は、六月十日(土)、大会研究発表会場と同じ同志社大学今出川キャンパスで十二時五十分から宮武幹事の司会により行なわれた。はじめに第一議案として山田理事が満場一致で議長に選出され、その後は山田理事により議事が進行された。第二の議案、平成二十八年度の事業報告および決算報告は、中村副会長によりそれぞれ説明が行なわれ監査報告がなされ、拍手で可決・承認された。

次に第三の議案として、同じく中村副会長より平成二十八年度の事業計画案および予算案が提案され、総会・大会、研究会、各地区の例会予定、会報・会誌の発行計画、収支案等の説明がなされ、これもとくに異議なく全会一致で承認された。

最後に、第四の議案として役員改選案が説明され、拍手をもって承認された。これを踏まえて熊倉功夫会長の再任と以下役員が承認された。

なお、総会で承認された役員の一覧は下記

のとおりである。(敬称略・五十音順)

会長

熊倉功夫

副会長

矢野 環

中村修也

参与

倉澤行洋

谷 晃

戸田勝久

中村昌生

理事

飯島照仁

池田俊彦

岩崎正弥

岡本浩一

神谷昇司

佐藤豊三

竹内順一

田中秀隆

谷村玲子

佃 一輝

永吉溪滋

原田茂弘

船坂富美子

H.S.Henneman

美濃部 仁

山田哲也

吉井 清

堀内國彦

監査

吉永清志

筒井紘一

(敬称略)

系については、脾胃論、淡泊な味覚と、心の修養が挙げられます。脾胃論は「飲饌服食箋」冒頭で言及した長寿不老術です。脾胃は余分の水分を嫌うという傾向があり、水分の摂取を制限し、胃の働きを強くすることができる、といえます。また、「生薑を烹炙し、椒馨珍珠」のような食事を嫌うことは、味覚的に淡泊を好むことに等しいです。さらに、「飲饌服食箋」は穏やかな気持ちを保つべきということを言及し、心の修養の大事さを心がけなければならぬといえます。

最後に、「飲饌服食箋」中の「茶泉類」に

オリジナル性の持つところは、嘉靖年間より

万暦年間にかけて、変革した喫茶法と関わっています。『遵生八箋』は編纂書ですが、著者は飲み方に工夫していたと見てよいのではないかと考えています。

(平成二十九年四月二十二日)

「大野鈍阿―数寄者に育てられた名匠―」

門井 睦美

大野鈍阿は、益田鈍翁のお庭焼師として文献等にふれられることはあるものの専論はない。

そこで、高橋箒庵の茶会記録「東都茶会記」

や『萬象録』等を中心に、聞取・作品調査という基礎的作業を踏まえて、鈍阿が近代実業家茶人達と係わりながら、名匠茶陶家に脱変していった道のりの跡づけを試みた。

鈍阿の家は代々続く美濃焼産地の陶家で、従来の徒弟制度を受けて一人前の陶工となった。その後、上京していた大正二年、近くに住む御殿山の鈍翁と巧まずして出会ったことからお抱えのお庭焼師になり茶陶家の道を歩むことになる。

鈍阿は、鈍翁指導のもと多くの茶陶名品を真直に写し、短期間で技量を高めて、次第に写しの作陶のなかに鈍阿の個性を押し込めた作品にしていった。

今回は、鈍阿が名品を写した鈍太郎、七里、空中耳付水指等の七作品と史料の読み解きで若干の知見を報告した。

一方、鈍阿が上目黒に独立以降も関係の続いた鈍翁、箒庵、根津青山をはじめ、数寄者達との関わりから、とりわけ「昭和茶道記」で、青山東宮御所内の秋泉御茶室に納められていた鈍阿焼器具謹製について、「秋泉御茶室日誌」により鈍翁を通じた懐石道具であったことや初使用日、懐石料理等の詳細資料を知得した。

名声を得た鈍阿は、総持寺倚松庵、高山寺遺香庵、護国寺艸雷庵の茶室待合半鐘の寄進者名に刻まれ、生涯鈍翁、箒庵、青山の恩を忘れず、近代茶の湯文化の一翼を担った名匠茶陶家であった。

(平成二十九年六月十日)

### 「貞明皇后の茶道具」

依田 徹

貞明皇后(大正天皇妃)は、昭和五年(一九三〇)に明治宮殿から隠居所である青山御所(大宮御所)へ移った。この時、三代木津宗詮(聿斎)の設計で、四畳半の茶室「秋泉御茶室」が付けられる。本発表では、この秋泉の御茶室における茶の湯の実態を、確認できる資料から跡付けるを試みる。

茶室の竣工に際して三千家と敷内家の四人の家元、それに木津家を加えた五家に茶道具の献上が命ぜられた。各流派の家元は、職家に命じて特別に好み道具を制作して献上しており、その概要は川上邦基「秋泉亭御道具之記」に記録されている。以後、いくつかの茶道具が断続的に追加されるが、その全容解明は困難である。

炉用の釜は、貞明皇后の実子である秩父宮

雍仁親王から献上された。これは正木直彦に諮問があり、大國藤兵衛(栢齋)が制作にあたった。また昭和十六年十一月には、秩父宮が三重県津の川喜多半泥子を訪問。この際に御前制作が行われ、茶碗四点、水指一点が貞明皇后に献上されている。

貞明皇后は、東久世秀雄内匠頭の指導で稽古も始めているその実態については不明な点が多いが、「貞明皇后」(主婦の友社、一九七二)には、関係者の回想が記されている。また皇后みずから、専用の稽古着「御茶席召」を考案していた。昭和十五年六月には、満州皇帝・溥儀が来日し、同月二十九日には大宮御所を訪問した。この時、秋泉御茶室で茶事が催された様子が、「高松宮日記」等から確認できる。

### 東海例会

(平成二十九年四月二十二日)

「平重盛伝来の箱書をもつ」

内金張り茶碗と馬蝗絆

岩田 澄子

射和文庫(三重県松阪市)所蔵の金属製茶碗について調査を行い、二〇一二年に近畿例会で発表した(会報七十九号)。この茶碗の

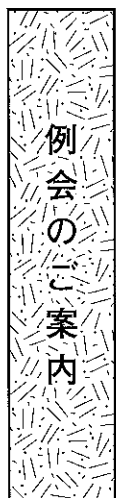
箱の蓋裏には、小松重盛(平重盛)を筆頭に八名の名前が列挙されているため、平重盛にまつわる伝承を持つ二つの重要文化財——「馬蝗絆(青磁茶碗)」と「金渡の墨蹟」——についても紹介した。

そこで、「馬蝗絆」という碗名の由来は、蝗(イナゴ)のような鉄釘(鏝)で補修されているから」という現在常識となっている説明をしたところ、汪玉林氏(北京外語大学教授)と倉澤洋氏(神戸大学名誉教授)から「馬蝗と蝗は全く違う生き物である」と指摘され、考察を行なった(「馬蝗絆の語義について」会報七十五号)。

馬蝗は、中国語で蛭(ヒル)のことである。まず、北宋時代に腹が黄色いヒルが蝮蟻と呼ばれ、後に蝮蟻はヒル全般を指す名称になった。そして蟻と蝗は発音が同じ「huang」なので、蝮蟻(ヒル)は馬蝗とも記された。元時代の「酷寒亭」では、蝮蟻(馬蝗)が「びつたりくつついて離れない」という比喩として使われており、鉄釘がヒルに喩えられたのは、外観だけでなくその性質も似ているからと言えよう。

「馬蝗絆茶甌記」を著した伊藤東涯は、「馬蝗のような(如馬蝗)鉄釘」と記すが、馬蝗

が何かは説明していない。しかし日本では馬蝗が「うまびる」と訓読されていたので、東涯は「馬蝗=ヒル」と理解してこの文章を書いたと考えられる。



### 例会のご案内

#### 東京例会

七月二十二日(土) 午後二時

(会場:五島美術館)

「美濃窯における織部茶入の

定義と評価(仮)」

内田昌太郎

「茶の湯」展開催の意義と今後の課題」

三笠 景子

九月三十日(土) 午後二時

(会場:五島美術館)

「粉引・無地刷毛目と粉粧粉青沙器」

吉良 文男

「日本に伝世する粉引・

無地刷毛目について」

砂澤 祐子

「箱の蓋裏には、小松重盛(平重盛)を筆頭に

八名の名前が列挙されているため、平重盛に

まつわる伝承を持つ二つの重要文化財——

「馬蝗絆(青磁茶碗)」と「金渡の墨蹟」——

についても紹介した。

そこで、「馬蝗絆」という碗名の由来は、蝗(イナゴ)のような鉄釘(鏝)で補修されているから」という現在常識となっている説明をしたところ、汪玉林氏(北京外語大学教授)と倉澤洋氏(神戸大学名誉教授)から「馬蝗と蝗は全く違う生き物である」と指摘され、考察を行なった(「馬蝗絆の語義について」会報七十五号)。

馬蝗は、中国語で蛭(ヒル)のことである。まず、北宋時代に腹が黄色いヒルが蝮蟻と呼ばれ、後に蝮蟻はヒル全般を指す名称になった。そして蟻と蝗は発音が同じ「huang」なので、蝮蟻(ヒル)は馬蝗とも記された。元時代の「酷寒亭」では、蝮蟻(馬蝗)が「びつたりくつついて離れない」という比喩として使われており、鉄釘がヒルに喩えられたのは、外観だけでなくその性質も似ているからと言えよう。

「馬蝗絆茶甌記」を著した伊藤東涯は、「馬蝗のような(如馬蝗)鉄釘」と記すが、馬蝗

十月二十八日(土) 午後二時

(会場:五島美術館)

「七宝の茶道具について」

福島 修

「川上白」利休居士石浮図銘」について」

石塚 修

#### 静岡例会

十月十四日(土)もしくは十五日(日)

(会場:静岡産業大学情報学部藤枝駅前キャンパス(愛称V I V I (ビビ)一階)

「おもてなしの茶

テーブルコーディネートなどを交えて

お茶の楽しみ方と、おもてなしの内容を

考える」

未定

会費 一、〇〇〇円(お茶・お菓子・資料)

共催 静岡産業大学地域学研究会

ター・世界緑茶協会

(日程が決まり次第、お知らせいたします)

#### 東海例会

六月二十四日(土) 午後二時

(会場:名古屋文化短期大学)

「古銅花生とキヨソーネ美術館」

西田 宏子

九月三十日(土) 午後二時

(会場:名古屋文化短期大学)

「土と長石の祖先は花崗岩」

志野・織部・黄瀬戸を科学する」

高木 典利

十一月二十五日(土) 午後二時

(会場:名古屋文化短期大学)

「未定」

岡 安憲

#### 近畿例会

七月八日(土) 午後二時

(会場:同志社大学今出川キャンパス)

「聲」を詠む——頼山陽の漢詩にみる煎茶」

鳥村 幸忠

「徐熙筆鷺絵についての問題」

影山 純夫

#### 金沢例会

八月二十六日(土)

移動例会(金沢〜堺 バス運行)

堺市南宗寺・利休屋敷跡(解説 飯島照仁)

利晶の杜(詳細はお問い合わせください。)

連絡先: 090-3762-2470 (吉井)

九月十日(日) 午前九時

(会場：金沢湯涌江戸村 旧山川家住宅)

「江戸村茶会」

平成三十年三月二十四日(土) 午後一時半

(会場：近江町交流センター)

「岡倉天心「茶の本」について」

田中 秀隆

高知例会

六月二十五日(日) 午前十時～正午

(会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「茶の湯文化学会二十九年度大会の

研究発表をテーマとしたシンポジウム」

軽食茶事 正午～十六時

席主 四名

会費 千円

※参会希望者は予め連絡をして下さい

九月三日(日) 午前十時～正午

(会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「野崎菟園について」

野崎 温子

十二月三日(日) 午前十時～正午

(会場：湯川温泉)

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「未定」

茶事 正午～十六時

席主 四名

会費 五千円

※参会希望者は予め連絡をして下さい



新刊紹介

\*『徽宗「大観茶論」の研究』熊倉功・程啓  
坤編 宮帯出版社(定価四、五〇〇円+税)  
本書は、宋の喫茶文化、抹茶法の起源に迫る。徽宗と大観茶論と日本との関わりについて、明らかにする。

\*『岡倉天心「茶の本」をよむ』田中仙堂著  
講談社学術文庫(定価一、一七〇円+税)  
現代の茶道の実践者である著者が新たな邦訳でやさしく解説する。

\*『平成のちやかぼん 有斐斎弘道館 茶の湯歳時記』濱崎加奈子・太田宗達著 淡交

社(定価二、〇〇〇円+税)

知的な茶を愉しむ。

\*『茶の湯名心庵自會記』川上宗雪著 茶の湯江戸千家発行(定価六、〇〇〇円+税)

平成二十八年、襲名より五十周年にあたり古稀を迎えての自會記。

\*『現代中国茶文化考』王静著 思文閣出版(定価五、五〇〇円+税)

中国の現代茶文化を映し鏡として、文化が本来もっている意味や力を見つめ直す。

